

国史跡 小早川氏城跡

沼田高山城——その遺構

末 森 清 司

◎沿革と概要

小早川氏城跡、沼田高山城（以下「高山城」と略記する）は、小早川四代茂平公が建永年間（一二〇六～一二〇七）に沼田庄に来住し、築城したと伝えられている。

小早川氏は、初代土肥実平から始まり、鎌倉幕府創建者、源頼朝の家臣として源平合戦において、実平・遠平親子が平家追討に活躍し、その戦功の賞として沼田庄を拝領した。

遠平の養子・三代景平は養父遠平より沼田庄地頭職を拝領するが、建永元年（一二〇六）、子茂平に譲る。茂平は相模国土肥郷より一族郎党を引き連れ来住。本郷塔の岡・中岡付近に家臣ともども居館をおいて、沼田庄の経営支配を進めた。

高山城は小早川氏の本拠城として茂平が築城し、以後一七代隆景が新高山城を改築して移住するまで三五〇有余年の間、代々栄えた。

高山城は標高一九〇m、広さはだいたい一六ha、周囲四kmはあろう。東に仏通寺川、西に沼田川で、両川が天然の壕の役目を果たしている。城山の山塊は岩が絶壁を成し、攻め難く守りやすい堅い要害になっている。城山は中央の広い谷を挟み、南と北に山稜があり、「複合連郭式中

世山城」の造りとなっている。

本郷側南山稜には東から南の丸（出丸）、犬丸（南の丸）、巖丸（千畳敷）、高の丸（権現丸）、太鼓丸、西の丸（出丸）の主要郭が連なり、堀切、帯曲輪・支曲輪・本曲輪・武者走りなどで囲まれている。

真良側北山稜は、東から扇の丸、出丸、本丸、戸石丸（二の丸）の主要郭が連なり、トヤの段、弩屋敷（堂「半」屋敷）の番所曲輪、それらを囲む支曲輪・帯曲輪・堀切が数多く築かれ、強固な守りとなっている。北山稜は、南山稜の曲輪と違って石積み遺構が多く築かれ、年代も新しい。

中央の谷地は広い面積となっており、東側に京屋敷、西方に馬場の地名が残る。

登城道は、大手道が船木堂谷から登る道とされ、標高一五〇mあたりに門跡（大手門）があるといわれているが、今は分からない。搦手道は北山稜より真良へ下る道である。鎌倉期の大手道は塔の岡から南山稜へ登る道と思われる。搦手道は西の丸から堂谷へ下る道だったように思われる。

井戸は今も湧き出ているのは一ヶ所。中央の谷、巖丸の北裾の大杉の

下、浅いが立派な石組の井戸で、どんな早懸かんざにも枯れたことがないという。別名若宮の井戸という。

以上が城跡の概要である。建永年間、茂平公築城より三五〇有余年間の貴重な史跡も、今は雑木、矢竹、雑草が生い茂り、その遺構も荒れ果てて見る影もない。

城跡 三原市高坂町真良。一部、豊田郡本郷町。

JR本郷駅より北へ歩いて約三〇分。

◎高山城跡曲輪の名称(地名) 堂(牢)屋敷の段について考える

高山城跡「北の丸」の北方の屋根上に「堂(牢)屋敷」と地名の記された段(曲輪)がある。その由来と、城跡の遺構上においてどんな役割を果たした段であったかを探ってみたい。

「堂(牢)屋敷」と地名の記されている段は、高山城の真良側北山稜に連なる「北の丸」から、比高差約五〇m下った斜面から北へ向ってのびる山稜の屋根につくられている。

標高約一三六m

段(曲輪)の長さ 約五五m(南北に)

幅 約一〇m〜一五m

この段は二段または三段に区画されていた(仕切られていた)様に見える。「堂屋敷」と記されている一面は、長さ約一八m、幅約一〇m。面積は五〇坪ぐらいだろうか。

その北側に仕切られたと思われる段は、長さ二五m、幅約一五m。面

積は一一〇坪ぐらいだろうか。この段は中央部が径約八m。丸くなって少し高くなっている。標高約一三七m〜一三八mだろうか。

段の斜面は崖状に削切して急峻にしてあるが、石積みの遺構は無い。段の南側、背面にあたる「北の丸」から斜面下に幅二m前後の堀切があったと思われるが、現在は埋まってしまつてその跡らしき形態をとどめている。今は真良搦手道より、犬走りと帯曲輪を伝つてこの段に入る道となつている。

堂屋敷の曲輪から山稜が左右に別れて連なっている。左側、船木板屋ふねいた谷の北へのびる尾根と、右側、真良搦手の谷の北へのびる尾根。この両尾根上には、堀切・曲輪が築かれており、高山城の城の遺構である(外城の遺構)。

☆「堂(牢)屋敷」の名称について

「堂(牢)屋敷」と記されている地名であるが、地元の人「ドヤトキ」といつておられる。地名の伝えは残っていない……。この地名について聞いてみてもつぱら要領を得ない……。

- 堂があつたんじゃ(四ツ堂の様なもの)。
- 御堂(寺)の様な建物があつたんじゃ。
- 牢屋(牢舎)が建つた……。
- 座敷牢のある屋敷があつたんかの。
- 人質を幽閉しつたんじゃ。
- 敵方の捕虜を居住させていたんじゃ。

・お寺でもあったんか……。

以上、各自いろいろなコトバが出てくるが……。城郭のうちとして考えると、地形・場所的にみて、上記のコトバは、すべてあてはめにくい様である。そこで「堂（牢）屋敷」「ドウヤシキ」「ロウヤシキ」「ドヤシキ」という言葉の意味を調べてみた。

使用辞典は『広辞苑』（岩波書店）、『日本国語大辞典』（小学館）、

『大辞源』（角川書店）である。

「堂屋敷」

「堂」

・たかどの

・おもてごてん。公事を行う広く高い御殿。

・昔、土を高く盛ってその上に造った南向きの大きな部屋。

・北側の小部屋を室という。

・衆人の集まる建物。

「屋敷」

・家屋の敷地。

・家を造るべき場所。

・武家屋敷の略。

以上の意味からみると「堂屋敷」は地形・場所的にあてはめにくい。

「牢屋敷」

・牢屋の敷地。

・牢屋を構えた一区画の土地。

この字も場所・地形的にみてあてはめにくい。牢屋ならもっと奥深い場所とか、逃亡しにくい段に設置されると思うが……。

「ロウヤシキ」（ろうやしき）

城に関係する文字をあてはめてみた。

「楼」

・遠くを見るために城などにつくられる高いやぐら。

「楼屋敷」

・楼のある建物があった一区画。

・楼を構えた一区画の土地。

・高い建物があった場所。

・楼を建て、番所において見張りの番人（兵士）が詰めていた

場所。兵士（番人）の宿舎もあった。

場所・地形・城の遺跡・曲輪の様子からみて一番あてはまる文字と思

われる。

なお、三原高校所蔵『古高山城絵図』には番所と記してある（注一）。

「ドヤシキ」（どやしき）

地元の人が伝えるコトバから「ド」「ど」をいう字を調べ、城に関連す

るものを記すと次のようになる。

「弩^ど」

・石弓、大弓。

・武器のひとつ。

・投石具として、基本的には弓の反動力を利用とした構造をと

り入れている。

・竹や木や金属の張力を利用して矢・石などを打ち出す強力な弓の一種。兵一人で操作できるものから大型の矢を射出するものまであった。

「弩屋敷」

- ・弩器具を収納する庫くらがあった。
- ・弩器具を備えた屋敷。
- ・弩器具を備えた番所、宿舎などの建物のあった一区画。
- △番所、宿舎があり、武器として弩などの特殊な武器が備えてあった場所▽
- ・弩士（石弓の射手）の宿舎または屋敷があった。

☆堂（牢）屋敷の段の場所について

「ドヤシキ」の「ド」にこだわって城に関連する「弩」をあてはめてこの段（曲輪）の場所をみると。

真良側北山稜に連なる主要部の北西部に位置する。この段の東（真良側）、西（船木側）に城下を固める武士屋敷を構え、家臣団の居住する谷がある。

この谷を包括する役目を果たす山稜が堂屋敷の段を中心にして左右にのびており、この山稜尾根に堀切・曲輪がいくつもつくられており、堂屋敷の段はこれらの曲輪の要（中心部）にあたる。両方の谷を連絡する連絡がこの段に通じている。高山城の北側の山稜は、高さは低いが入り組んだ谷が多くあり、このあたりの備えも必要である。

以上の事から「堂屋敷」の段を察すると、

- ・番所が置かれていた。
 - ・警備する番人（兵士）がいた。
 - ・居住（番人の寝泊まり）する建物があった。
 - ・見張用の楼が建っていた（場所は「堂屋敷」の段の北側の小高い段）。
 - ・戦いくさの時は弩手が詰めていた。
 - ・戦の時、防衛線の陣所であった（これは天文一三年（一五四四）尼子国久が高山城を攻めた時、この段からの山稜が高山城の防衛線であり、尾根・曲輪にすべて冊を築いて旗・幟はたけを立て、防戦したと思えるからである）。
- 等々が考えられる。

☆この段の飲料水について

番所があり、建物があったり、番人・兵士がいる事となると、水の必要がある。この飲料水は、段の西側の谷へ約五〇m弱下ると、板屋の谷の奥にあたり水が湧いている。今も枯れる事なく湧いており、その心配ない。建物の中に水ガメが用意されていた。私らが子供の頃は、遠くはなれた所から井戸水をくんで運んだものである。

☆まとめ

地名の伝え、曲輪の位置を・地形など、以上の事から「堂屋敷」の段についてまとめると次のようになる。

堂（牢）屋敷は、高山城真良側北山稜の「北の丸」北東部より比高差約五〇m下、距離にして約八〇m余のところより北側へのびる山稜の尾根につくられた曲輪である。

この山稜は段の先方より左右に別れており、左は板尾根谷、右は真良侍屋敷の谷を包括する背となっており、山稜尾根にはいくつもの曲輪と堀切がつくられている。

東と西の谷は武士屋敷が置かれ、家臣団が居住していた。この曲輪は両方の谷からの通路でもあり、備えとして常時警備する番所が置かれていたが、番所的な警備だけでなく、船木、真良の武士屋敷の谷とそれを包括する山稜上に曲輪・堀切などを築いて一体化させている。つまり、高山城の本丸、戸石丸、北の丸などの北山稜に連なる主要部の北側の前方的防衛線上の砦の様な形であり、城としては攻められ易い北側の弱所を強固に固めて敵からの攻撃に対する備えとしたものと思われ、戦などのイザといった時は、指令所的な陣所にもなった様に思える。

曲輪には、番所・宿舍・楼・兵器庫などの建物があつたとみられるが、それらの遺構をとどめる礎石などは今は分からない。

平常は小人数の番士で見張り、警備をしていた様に思えるが、緊急の場合とか、戦の時は兵士・弩士が谷の武士屋敷などから駆け付けて守りを固めたのではなからうか。

台戦となつて、東と西の武士屋敷の谷を敵から攻め込まれ、破られて谷より攻め登る敵兵に対して、この曲輪が「石落としの段」（石弓の段）の役目を果たす。谷から攻め登る敵兵に対し、この段より弓石を投射す

る最適の位置でもある。

以上のように、この堂（牢）屋敷は多様な役割を果たす曲輪である。

（注一）江戸時代初期、三原浅野氏の命によって直接調査されたものを

三原図書館初代館長、沢井常四郎氏の意志により昭和初期原図より影写されたもの。原図は広島市吉島町にあった三原浅野家の別邸「万象図」の蔵で原爆により焼失。

◎高山城 弩と曲輪について

新高山城内二の丸の西方に「石弓場」「石弓の段」と伝える曲輪がある。二の丸から北の丸へ続く山稜の尾根上の馬背状の削平して段とし、谷から敵兵が登ってくるのに対し、この段より石弓を投射して敵を防ぐ備えと伝える。

高山城には名称は残っていないが、これにそっくりな遺構の段がみられる。おそらく新高山城を築いた時に高山城のこの遺構をまねたものと思える。弩はこの「石弓場」「石弓の段」に利用された武器具ではなからうか。単に下から登ってくる敵兵に対し、石を転がして落とすだけでなく、勢いをつけた石を投射する方が殺傷力が強いし、敵方にとっては驚異であろう。

もうひとつ。高山城には真良武士屋敷の谷から登る「水の谷道」（真良ヨリ三尺道）と搦手道に「石落とし」？の遺構が残る。

敵が道を攻め登って来た時、この遺構から石を落とす仕掛けだけでなく、弩を使って石を投射する壇（段）と思うのだが、つまり一種の「弩

壇」で、単に石を転がし落としたのではなく、弩や大弓などを利用した守りの曲輪(段)と思えば、充分納得出来ると思えるのだが……。

高山城の「石弓の段」と似た遺構は、太鼓丸の所にある段(西の丸との間)、弩(楼・櫓)屋敷(堂「牢」屋敷)の段など。「石弓場」の遺構に似た曲輪は各所に見られる。

◎高山城 北側支尾根の外曲輪の遺構

真良側北山稜主要部の守備曲輪(出城)

高山城について次の様な文章がある。

高山城は峯が二つに分かれている。これは實際城にたてこもる場合に、谷をはさんで戦力が二分されなければならない事を意味しているだろう。この山は南面の形が非常にすぐれており、又前面には複雑に入り組んだ丘をすえているから、ここに適切な施設を置けばおそらく南方からの敵には、難攻不落であろう。

しかし、二つの峯に分れており、北方の峯は南方ほどには峻厳ではない、と思われる事が弱点であり、いわば城としてまとまりに欠ける所がある。(以下略) 石井進著『日本の歴史12 中世武士団』

高山城真良側北山稜の主要郭群は北方からの攻撃に対しては弱い。山の斜面もゆるやかで高さも低い。城を強固にするためにも弱点を補い、施設を造って備えをする必要がある。この施設の備えが、ドヤシキ(堂

「牢」屋敷・楼屋敷・弩屋敷)段から東西にのびている支山稜の尾根上に築かれた堀切と曲輪である。

ドヤシキの段の先端斜面より東西に尾根が分れて支山稜となり、東側は真良武士屋敷(搦手口)の谷の北側へ、西側は板屋谷の北側へと共に谷の北面を包括するようにのびており、その先端は仏通寺川岸、菅川岸である。この支山稜の尾根上にいくつもの堀切と曲輪が築かれて、高山城の北方側の外城・砦・出城・外曲輪(郭)的な役割を果している。この山稜尾根上につくられた堀切・曲輪には、石積み(石垣)の遺構はひとつも見当たらない。すべて削平・削切りである。

造られている堀切は、大体、幅3mくらい。深さは当時2m以上あったと思われるが、今はほとんど埋まったり崩れたりして、○・5m〜1m弱である。

この山稜に堀切や曲輪を造った年代は分らないが、南北朝以後室町期にかけて北山稜の主要部が一応整備された後、戦後期に入り、天文の初め頃、急遽築かれたように思える。高山城内の主要部のようにしっかりとした曲輪の造りではなく、急造りの粗^{あら}っぽさが感じられる。尼子氏の備えにしたのだろうか……。

◎堂(牢)屋敷の段より東へのびる支山稜尾根の堀切と曲輪

△絵図面参照の事▽

堂屋敷の段(曲輪)より東へのびる支山稜は、真良武士屋敷の谷(城内石の丸)の北側を包括する様にのびて、その先端は仏通寺川岸である。

同屋敷の段からの全長は約四五〇m有余で、尾根の背幅は大体七m前後である。堂屋敷の段の先端を東に向って尾根を下ると、約五m〜六mくらいは崖状であるが、あとは割合なだらかである。この尾根は①堀切までちよつとした曲輪状になっている。

☆Aの背尾根の段

長さ約三八m余。背尾根は幅約七m〜八m。先端は約一・五m〜二mの比高差で、その下に①の堀切がある。

①の堀切は、幅が約三m。深さは約〇・五m（当時は相当深かった）。堀切は尾根をすっぱり切っており、長さは約一〇m〜一二m。

Bは上の段と仮に名付ける。平坦で、一見してしゃもじ形の段である。長さは約二八m。幅は六m、広い所で約一〇m。面積は八七坪くらいか。下の段との比高差は約六m〜七m、先端は崖となっている。

②の堀切は幅三m以上。深さは一・五m以上。北側の斜面に残る深さは三m以上。長さは二〇m以上。この堀切が一番よく原形を残している。

③の堀切は曲輪を斜めに切った様に掘られている。幅は三m弱。深さは約〇・五m〜一mであるが、当時は相当の深さと思われる。長さは約一五mはあると思われる。

④は②と③の間にある土塁である。三角形の土塁で、三角の先端部は約一m。土塁の高さは一mで、南側の斜面近くは四m以上の幅となっている。

⑤は③の堀切の東側にある土塁でこの段の中央部を盛り上げている。

高さは約〇・五m〜一m。幅は二m〜三m。長さは六m以上はある。

Cは下の段。仮に「堀切の段」とでも名付ける。段の長さは約一四mか。幅は約六m〜七mである。南側に二m下って犬走り⑥（帯曲輪）がある。幅は約一m。長さは一五m〜一六mはある。

Dは下の段から堀切④までのびる下り背尾根である。背幅は六〜七m。堀切④までの長さは約一四〇mか。背尾根にわずかに溝状の道の遺構が残る。

④の堀切は深い。一・五m〜二mはある。幅は約三m〜四m。長さは二〇mはある。この堀切は、今は真良下「二の谷」から船木鶯谷への間道の峠となっている。ここに電柱が立っているので場所はすぐ分かる。

Eはこの山稜が分かれて北へのびる支尾根になっている分岐点上にあり、曲輪状になっており、見張台を置いた所の様に思える。

Fは山稜先端部への尾根である。この先の尾根は曲輪状になっており、民家が建っていたが、今はない。竹やぶになっている。当時は先端部にあたり、見張番の屋敷が番所の様なものがあつたと思える。この下が、本郷から仏通寺へ行く街道で、仏通寺川岸でもある。

EとFの北側斜面には帯曲輪や腰曲輪の段が三段〜四段建っている。また、溝状の武者走りに似た遺構も残っている。

堂（鶯）屋敷から東側支山稜尾根上に築かれた遺構には石積み（石垣）は無い。尾根部を削平して斜面を削り切つたりした曲輪と堀切である。また、この支山稜は侍屋敷の谷を包括して、谷を守る形となっている。

◎堂(鸞)屋敷の段より西北船木へのびる支山稜尾根の曲輪群と堀切

△絵図面参照の事▽

一堂(鸞)屋敷の段より西北方向の船木、菅川岸へのびる支山稜は、船木板屋の武士屋敷のあった谷の北側を包括する。この支山稜は、堂屋敷の段から全長約二八〇mで、尾根の幅は狭い所で約四m余、広い所では一五m以上もある。

支山稜尾根上には、三区画に仕切られた曲輪があり、それぞれ堀切で仕切られた各曲輪が一区画の独立性をもった様に築かれている。この曲輪群が、山稜の守りと同時に、谷の待屋敷、高山城の本丸・二の丸・北の丸等の主要部の守りとして出城(外城)、砦、城の前衛防御帯といった役割を果す曲輪群である。

この山稜に連なる堀切・曲輪の遺構には、高山城内の主要部から比べると、石積み(石垣)は見られず、粗削りな造りの様にも見受けられるが、真良仏通寺川岸までのびる山稜ともども全体の曲輪配置としては立派であり、一見の価値は充分にある。

この尾根の曲輪に至るコースは、真良の搦手道から堂屋敷の段を通り西北へ、つまり、船木方面に向って尾根を下る。船木の境界標が足元に打ってあるので、それを目印に下っていくと、尾根上の曲輪に着く。

もうひとつは、船木板屋谷に入り、川上菊松氏宅の上にある荒神社の所から裏山の道を登り、左方面に道をとって斜面を突っ切って行くと、下の曲輪の切通しへ出る。分かりにくい場合は、JRの鉄塔が立っているから、それを目指して登ると良い。鉄塔が立っている所は下の曲輪の

両端である。

堂(鸞)屋敷の段を西北の方向、船木方面へ向って尾根を下る。尾根を約八〇m下ると左側に、幅二m余の帯曲輪に着く。◎の帯曲輪である。この帯曲輪を一〇m余下ると右上に段がある。①の段で、長さは約一〇mか。幅は五m前後。堀切Aの土塁も兼ねている。弓射場・投石場の役目もする段とも思える。

△上の曲輪▽

上の曲輪群は堀切AとBに仕切られた曲輪で三段になって鶯谷に向って造られている。この曲輪の長さは堀切AとBの間で約二二mある。

Aの堀切は、幅は約二m、深さ一m余り。長さは八m以上はある。

①の段はこの曲輪の上段で、長さ約一四m。幅は約四mで、Aの堀切に近づくほどせまい。

②の段はこの曲輪の主要郭①の段より二m下る。幅は広い所で約一二m。上の段の前方は約八mで、上の段を北東側(鶯谷方面)へ囲む様に造られている。

この段は射場の役割をすると思われる、左側の帯曲輪や前方の堀切に敵が来た時、二の丸の段より弓射する様につくられたと思われるが……。

この曲輪群の左側(板屋谷側)側面に幅三m弱の堀状の曲輪がある。武者走りの段③の一種と思われる、溝(堀状)の深さ約一m、幅約一・五mで、谷の斜面側が土塁状になっている。

板屋谷からの敵が斜面を登って来た時の尾根上の曲輪の備えとなる、

または敵の迷い道の役目を果すこの帯曲輪は、上の方は途中で消えるし、(行き止まり)下に下っても行き止まりとなる仕掛けである。

Bの堀切は幅約一・五m、二m。長さは七m弱。深さは約一m。堀から②の段への高さ(比高差)は四m以上あり、崖状である。この堀切は③の帯曲輪(武者走り)につながっており、先にのべた様に、板屋谷から斜面を登り帯曲輪を伝って来た敵方がこの堀切へ迷い込む、またはさそい込む様になっていて、②の曲輪より弓射する…と考えられる。また、鶯谷からの敵もこの堀切へ迷い込む様になっている。

④の段は背尾根である。幅四m弱、長さは約二四m。鶯谷側の斜面は削り切り。板屋側は③の帯曲輪がある。

⑤はこの背尾根上にある土塁。幅約四m、長さは七m弱で、Cの堀切の土塁である。

▲中の曲輪▼

中の曲輪は四段の小曲輪(段)から成り、CとDの堀切で仕切られた曲輪群である。この曲輪の中心は⑤の段で、太鼓の様に丸い形の段である。径(長さ)は一〇mはある。Cの堀切との比高差は五m以上はある。この段がナゼ丸く築かれているのか、楼台だったのか、のろし台だったのか、今の所はつきり分からない。

⑥の段は舌状で、長さ約六m、幅は⑤の段を半分囲む様に造られている。⑥の段より約二m下である。

⑦の段は⑥の段より約一・五m下っている。長さ約六m、幅約七m。

舌状である。⑧の段は⑦の段より約一m下。長さ八m、幅は広い所で約六m。先端部は四m弱の舌状中の曲輪の最下段で前方はDの堀切で、比高差は約四m、崖状になっていたらしいが、今は崩れ登り易い斜面となっている。

この段の右側(鶯谷)斜面約六m下に土塁とも曲輪ともつかぬ段がある。Dの堀切の土塁を兼ねる帯曲輪を中の曲輪の備えとして腰曲輪状に造る途中中止した様に思える。

「中の曲輪」の全長は約三五m。幅は四m、二mである。この曲輪は、山稜の中央に位置する前後に深い堀切で仕切られている。山稜の斜面は天然形状であるが、一部手を加えて急峻な崖としている。

石積みみの遺構は見当たらず、礎石なども分からぬ。今は曲輪の段の形も崩れつつある。

▲下の段(堀切の段)▼

下の曲輪は全長約四五m、幅約七m、二m。段上に三本の堀切が掘られ、堀切の段とも名付けるか……。

⑨の段は「しゃもじ」の形状で、先端部は丸くなっていて面積も広い。段の長さは約三〇mで、丸い部分の長さは約一二m、一三m。

この段のHの部分は、長さ約一二m、一三m。幅は五m、六mか。馬背に近い形になっている。

この段の広い面積を要している前側の円状部に物見楼か見張番所小屋の様な建築物があったか。ここは下の街道のすぐ上に当るし、船木と平

野部も良く見えるし、板屋・鶯の両谷の要所的な場所にもあるし、番所的な曲輪とみても差支えなからう。

三本の堀切は、Dが幅3m弱、深さ約1m、長さは一五m以上。

Eは幅が3m余、深さ〇・五m、長さ約一〇m。

Fは幅が3m余、深さ〇・三m、長さ約一〇m。

④の土塁は幅約3m、高さ約1m。

⑤の土塁は幅3m弱、高さ約〇・五m。

EとFの堀切はほとんど埋まっている。

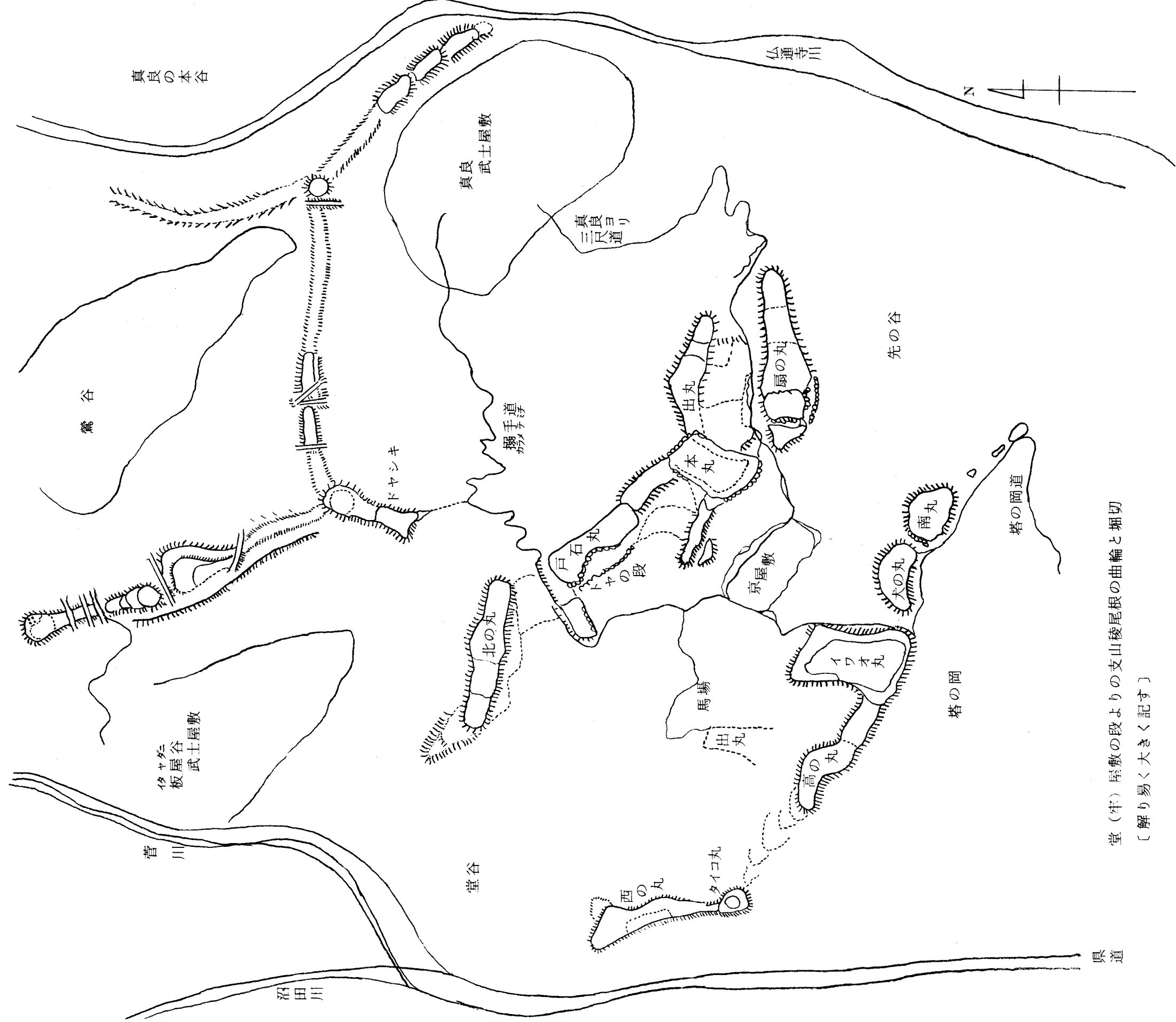
「下の曲輪」の標高は六〇mぐらいだろうか。この段の板屋谷側は傾斜がゆるい。約五mなだらかな傾斜になって急峻な斜面になっている。先端は段状になり、当時の遺構はこわされており、鉄塔が建立されたりして形状は変わっている。

鶯谷側は天然の形状のままであるが、一部に人工の手により削切した様に見受けられる。この段も石積みは見られない。粗けずりな造りの曲輪の様に見られる。

以上が真良側北山稜の「北の丸」「戸石丸」「本丸」「扇の丸」等の出要部と東西の武士屋敷の谷の守りとして、北側の「出城」「砦」「外城」といった役目の、防御線の曲輪と堀切の遺構である。

この山稜の曲輪と堀切が築かれた年代は分からないが、戦国期初め頃であろうか。年号でいえば、天文初期頃だろうか……。

この山稜の遺構が役立ったのは、天文一三年（一五四四）一〇月、尼子の襲来の時であった……。

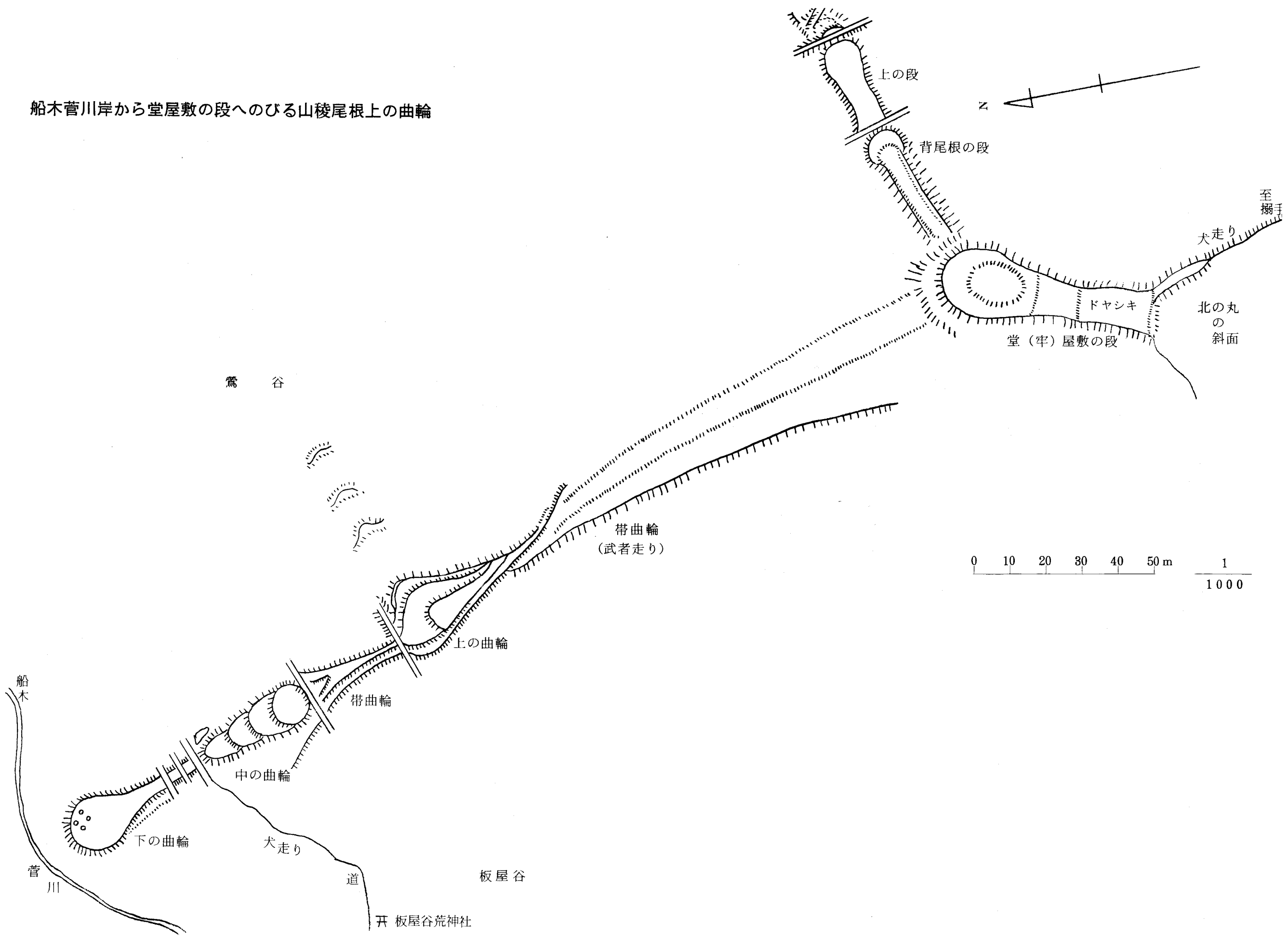


堂（半）屋敷の段よりの支山稜尾根の曲輪と堀切
 [解り易く大きく記す]

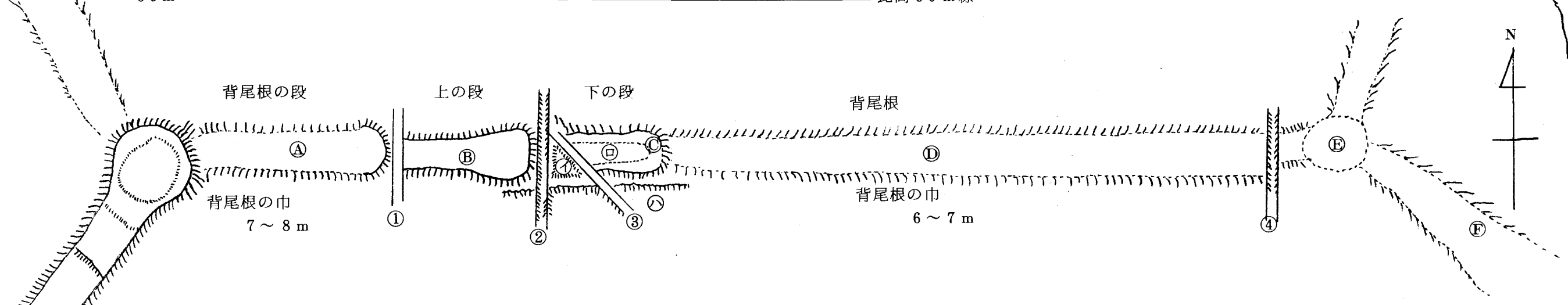
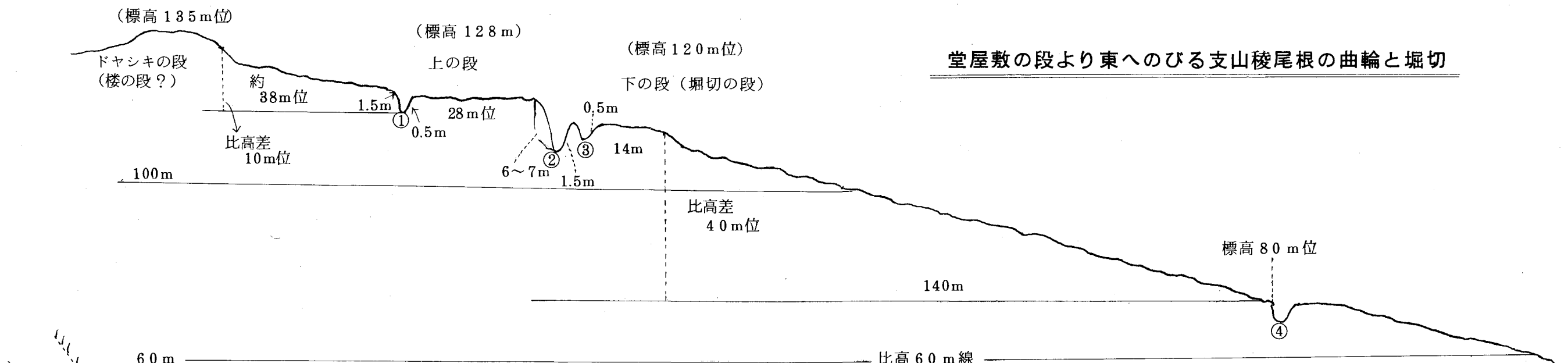
高山城曲輪略図

県道

船木菅川岸から堂屋敷の段へのびる山稜尾根上の曲輪



堂屋敷の段より東へのびる支山稜尾根の曲輪と堀切



①の堀切
 深さ 0.5 m位
 巾 2~3 m
 長さ 10~12 m

②の堀切
 深さ 1.5 m
 巾 3 m
 長さ 20 m
 北側の深さ約 3 m

③の堀切
 深さ 0.5 m位
 巾 2~3 m位
 長さ 13~15 m

④の土塁
 高さ 1.0~1.5 m
 三角の先端 1 m位
 広い所 8 m位

④の堀切
 深さ 1.5~2 m位
 巾 3~4 m
 長さ 10 m以上
 土塁の高さ 1 m以上

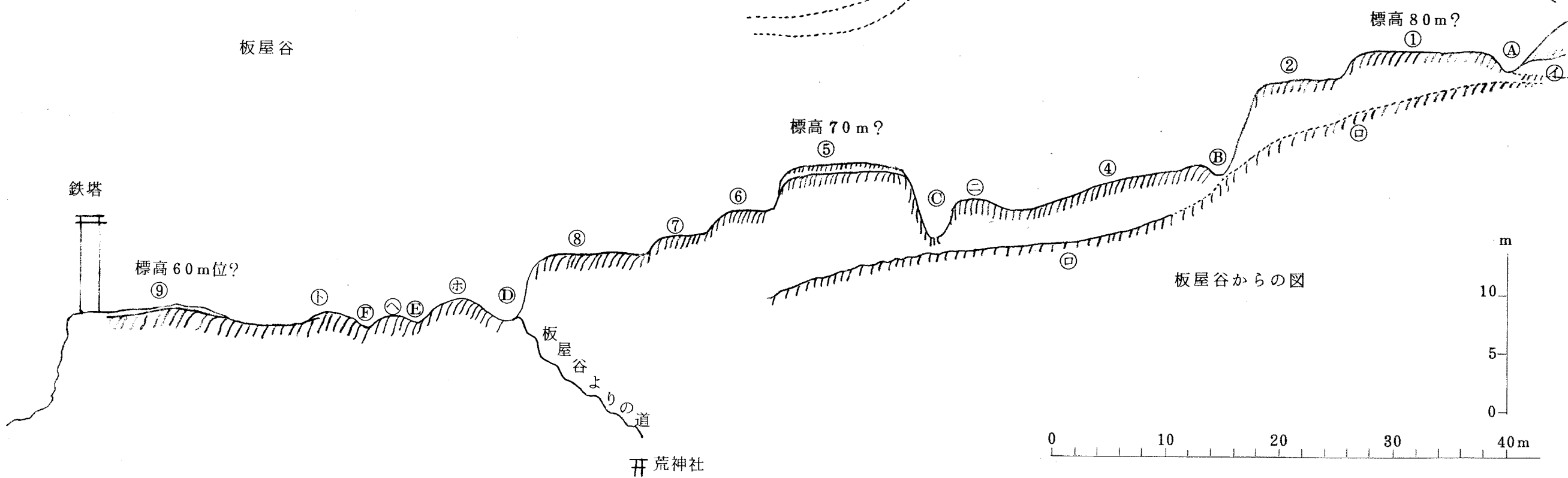
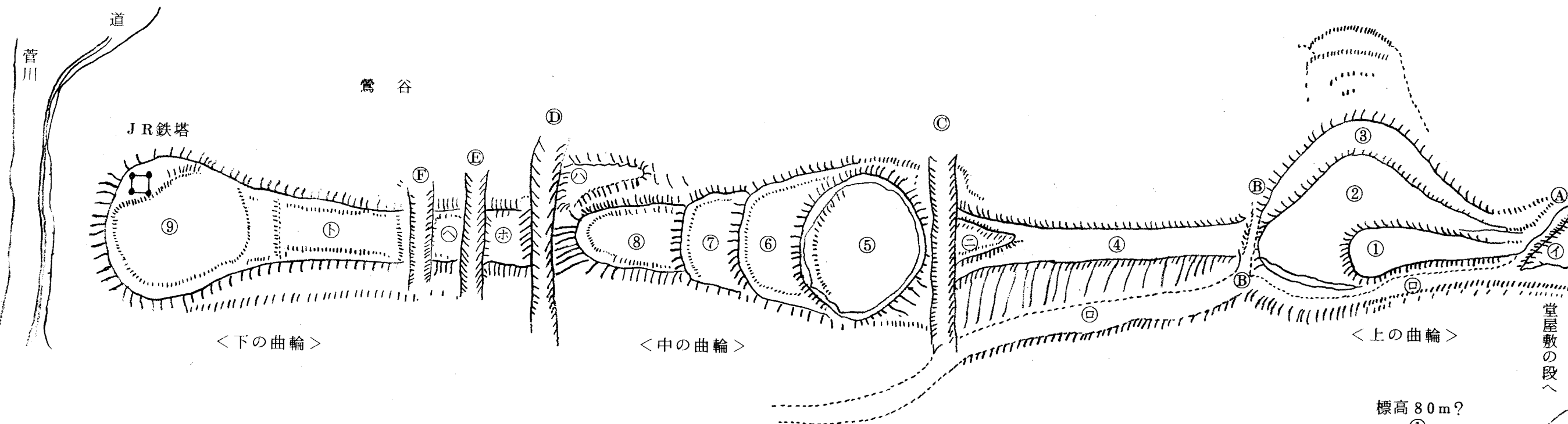
1
 1000

背尾根の段と堀の高さ
 約 1.5 m

上の段
 巾 6~10 m位
 長さ 28 m位
 上の段と堀の比高差
 7~8 m

下の段 (堀切の段)
 巾 6~7 m位
 長さ 14 m位

⑤の土塁
 高さ 0.5 m位
 巾 2~3 m位
 長さ 6~7 m位



船木菅川岸から堂屋敷の段へのびる山稜尾根上の曲輪部

全長 約 140 m 弱、3 区画に分れ、堀切で仕切られている
 高山城北側の出城（外城）の曲輪と堀切

